

## 澳門遺跡採集陶磁器 —17世紀中国青花貿易—

佐々木達夫・野上建紀・佐々木花江

**keyword** : 海上貿易、貿易拠点澳門、遺跡出土陶磁器、景德鎮青花、17世紀。

### はじめに

澳門はその位置から海上貿易の拠点として選ばれ、当時の様相を示す考古学資料も発見されている。澳門の聖オーガスティン教会（聖奧斯定教堂、St. Augustine's Church）は1591年スペインの修道士により丘上に創建され、1874年に修復された。創建当時は海岸近くに位置していたが、現在は埋め立て等で海岸から離れている。



Fig. 1 「澳門半島及港口圖」1884年『歷代澳門航海圖』上に地点の文字を追加

『澳門雜誌』（1997年12月，第3期，6-11.）によると発見経緯は以下のようなものである。1994年夏、建設工事中の段が連続豪雨のため崩壊し、聖奧斯定修院旧跡の斜面一部に防災工事が行われた。1995年7月に工事が再開され、地元の趙維富、鄧貴文、梁教智、潘国雄、許永秀の5名が掘削した土砂内から3千点を超える大量の陶磁器を採集した。大部分は明清代実用青花瓷で、丘麓地盤に瓷片が多く、表層は近代甕壺瓦など、中層は遺物がなく、下層は晚明清初の瓷片や海砂

と貝殻が含まれ、乾隆年間銅銭や日本寛永通宝もある。

萬曆年間（1573-1615）から康熙年間（1662-1722）が主となる澳門の貿易黄金時代の採集陶磁器片は、澳門博物館に寄贈され保管されている。陳迎憲（澳門特別行政区政府文化局澳門博物館長）、Roy, Sit Kai Sin 薛啟善（澳門博物館保存及修復）、陳志亮（澳門博物館保存及修復）のご厚意でその採集品を、盧泰康ご夫妻、台南芸術大学院生2名、潘国雄、佐々木達夫、野上建紀、佐々木花江が2010年7月、見学した。

### 聖奧斯定教堂跡採集品

多くの陶磁器片が掘り出された地点は丘斜面麓の建設工事に伴う掘削地であり、生活に用いて壊れた陶磁器が廃棄された場所であろう。また海岸付近採集品には船上からの廃棄品が含まれる可能性がある。17世紀前半の景德鎮青花が主となるが、その前後及び18世紀中頃までの製品も採集されている。1995年の建設工事で発見された古井戸内の墓から20数件の完形に近い青花皿碗が出土し、それは萬曆年間の製品であった。

採集品の大部分を占めるのは中国陶磁器であり、青花がほとんどを占め、皿が多く次いで碗となり、他に鉢瓶壺などさまざまな器種が含まれる。17世紀初頭を中心とした景德鎮芙蓉手皿がもっとも目立つ種類である。17世紀前半の薄い素地の典型的な型造り芙蓉手青花皿がかなりの数量を占める。芙蓉手皿と同じ年代の大振りの碗（萬曆～天啓）も少しある。芙蓉手皿の文様もさまざまな種類がある。17世紀中頃以降の景德鎮青花もみられるが、数量は少なくなる。

青花皿などの銘は「大明嘉靖年製」「大明成化年製」「成化年製」「大明宣德年製」「大明宣德佳器」「萬福脩同」「長春佳器」「天祿富貴佳器」「富貴佳器」「長命富貴」「玉石珍之鼎」「天啓五年燒造」「隆慶元年」「杏林春宴」「懷赤新造」「雅」その他、さまざまな崩れた文字や図像の銘がある。饅頭心の碗はないが、少し底が揚がり気味の碗が数点ある。青花ケンディが何点かある。ケンディの注ぎ口部に当たる象の目の部分片もある。合子や型物もわずかだがある。福建省漳州窯の大皿は景德鎮と比べるときわめて僅かであり、色絵も点数は少なく、漳州窯は少ない。17世紀がもっとも多く、18世紀前半までは破片がかなりあるようであるが、18世紀後半及びそれ以降になるときわめて少な



Fig. 2 崗頂遺跡（聖奧定教堂旧跡下方斜面）採集陶磁器：澳門博物館蔵品

くなる。19世紀まで僅かだが青花の破片が見られる。清代の青花大瓶や青花小杯もある。白磁碗・杯・皿に赤、青、緑、黄色で上絵が描かれる。青花レンゲが数点ある。アラビア半島でも普遍的に出土する福建省の18世紀後半～19世紀の質の落ちる福建省青花碗が僅かだが含まれている。ポルトガル砦が築かれた町であるアラブ首長国連邦のディバやコールファッカン出土品と同じものである。18世紀後半～19世紀の徳化の質の良い青花大皿も僅かだがある。18世紀景德鎮

の梵字文大皿、葉文皿がある。景德鎮青花が主となり、福建省青花が少ない。バンド文の福建省碗も1点のみで、極めて珍しい例となる。

中国の黒釉陶器壺や黄褐釉陶器壺もある。卸目のある播鉢が1片。内面が釉剥ぎされた粗質灰釉陶器碗。広東の16～17世紀の黄褐釉陶器四耳付大壺がある。トラジスカントの型文緑釉掛け白濁釉陶器壺・鉢がある。白磁瓶の安平壺もある。広州産という緑釉陶器の小壺、瓶がある。ヨーロッパ青花写しの中国青花皿がある。チャイナ伊万里皿がある。外側鉄釉（醬釉）の青花碗がある。鉄釉上白泥文瓶、清代の青磁上白泥文瓶もある。

聖奧斯定教堂跡の日本の陶磁器は2点で、きわめて少ない。有田の青花小杯17世紀後半が1片。有田の芙蓉手青花皿17世紀後半が1片。皿の見込み部分であり、裏側面に小さな穴が規則的に開けられ、4個が破片に並んで残る。小さな穴は貫通しておらず、鏝で破損部を補修した可能性が考えられる。割れた部分の断面はきれいに磨かれたような状態で半円形となる。中国陶磁器では補修穴がある破片は数点、補修孔がある破片は1点と少ない。補修孔に鉄鏝が残っている。大量にある中国陶磁器のなかで有田青花皿が修理されたのは奇妙である。いずれの補修孔・孔も径が小さくきれいに穿たれ、同じ技術を用いている。中国陶磁器が3千点ほどであれば、採集品で占める日本陶磁器2点の比率は0.06%ほどである。ただし、中国陶磁器の大部分は17世紀前半であるのに対し、日本陶磁器はいずれも17世紀後半であるため、同じ時代の製品と比較すると日本陶磁器の比率はやや高くなる。

ヨーロッパ施釉陶器も少量ながらあり、日本陶磁器と比べるとかなり多い。オランダの白濁釉アルバレロ薬壺、17世紀、高さが低い形である。オランダと類似した白濁釉の青色彩の碗やアルバレロ壺はポルトガル産である。イギリス産と思われる型紙刷り皿紫色絵皿などは19世紀後半～20世紀である。その他、ディバやコールファッカンで発見される同じ種類の19世紀後半～20世紀のヨーロッパ陶器、及びアラビア半島では未発見のヨーロッパ陶器がある。

西アジアなどで生産されたイスラーム陶器、スペイン陶器は無いようである。インドのゴア付近の土器については不明であるが、含まれていないようである。ベトナム陶器に類似した青花鉢があるが、広東地域の

製品であろう。ベトナム陶器は焼締陶器瓶底部が1点。朝鮮やタイ、ミャンマーなどの東アジアや東南アジアの陶磁器は含まれていない。

澳門の生活用品が主となる遺跡出土の陶磁器は16世紀末から17世紀前半の景德鎮青花が主要な製品である。17世紀後半から18世紀初までも景德鎮青花が主となるが、漳州窯青花も僅かながら含まれる。18世紀代の製品は出土量が減少している。19世紀には景德鎮青花に加えて福建省の青花、広東省の陶器も混じる。

### モンテフォルテ、葉家園などの採集品

モンテフォルテ (MFM: Macau Fortaeza do Monte) から有田青花が9点出土している。有田青花碗17世紀後半の青花碗は、澳門博物館に展示中で、野上がすでに報告している。底部外面に「太明」と記される。松文と梅文が外面に描かれ、内面に梅文が描かれ、輸出用品ではなく一般的な製品である。その他、有田青花髭皿2点は同じ個体と思われ、17世紀末～18世紀初。有田の17世紀後半の青花山水文碗3点、青花芙蓉手皿の小片3点が出土している。

Macau Fortaeza do Monte 及び Macau Patio de Ameaca (MPA) 葉家園は、ともに景德鎮青花が主で、16世紀末から17世紀前半の製品が多く出土している。18世紀、19世紀、20世紀の中国陶磁器も僅かながら含まれている。



Fig. 3 潘国雄採集澳門出土景德鎮青花

潘国雄さん採集の大量の陶磁器を澳門芸術博物館に運んでいただき見学する。16世紀後半から17世紀中頃までが中心となる景德鎮青花が主要な製品である。萬歴年間が中心となる。大皿、皿、碗、小碗、瓶など

が旧海岸付近のいくつかの地点で採集されている。ビル工事に伴う掘削時に採集されている。18世紀から19世紀になると、漳州窯の青花、徳化窯の青花も僅かに加わり、広州付近の陶器も見られる。聖オーガスティン教会跡斜面採集品とほぼ同じ傾向を示すが、饅頭心の青花碗などから始まり、聖オーガスティン教会跡斜面採集品よりも若干古いものから始まる製品が含まれており、16世紀後半から17世紀全般が主要な採集された陶磁器の年代である。17世紀の澳門は中国の生糸と日本の銀を交易する経済上の重要な位置を占めていた。澳門のポルトガル人の活動と密接に関連する年代の陶磁器である。



Fig. 4 潘国雄採集澳門出土景德鎮青花見学 (左から盧泰康夫人、台南芸術大学院生、盧泰康、盧大成、潘国雄、野上建紀、佐々木達夫、佐々木花江、Roy 薛啟善、陳志亮)

### 澳門採集陶磁器の特徴

見学した澳門出土品のなかに14世紀、15世紀の青花はない。青磁は非常に少なく、潘さんが探して翌日持ってきた15世紀の竜泉窯青磁盤口部片1点があったに過ぎない。

澳門で大量の16世紀末から17世紀前半の景德鎮青花が発見されたことは、澳門の貿易に関わる繁栄時期を具体的な物で示している。採集品が商品であったか、生活用品であったか等はいくつかの意見がある。

貿易品としての商品であれば、海岸の倉庫に保管されたり、壊れた積荷が海岸で破棄されたり、という様相が思い浮かぶ。土砂に海岸砂と貝殻が含まれることから、海岸の砂を丘斜面に運んで平坦地を造成したとも考えられる。貝殻が混じることは食糧残滓とともに生活で使用され破損した瓷片が捨てられたとも考えら

れる。旧海岸に沿う各地点で同じ種類の景德鎮青花が道路工事の際に採集されていることは、広い範囲での使用が考えられ、生活用品の廃棄であると考えられる。貿易商品が澳門に運ばれ、商品として再運送されると同時に、そこに居住した人々も商品の一部を澳門で使用したという状況であろうか。

考古学研究方法を用いた層位的発掘を行い、同じ層から出土する陶磁器の産地・器種の組み合わせと量的比率、産地分類の研究を行えば、歴史資料としての価値が高まる。澳門出土品であり年代が限られることは、陶磁器の貿易を考えるうえで重要な資料であり、ポルトガルのカラック船貿易資料として貴重な資料となる。

見学にあたり許可を頂いたと同時に、保管室から陶磁器の出し入れ等にもご協力を、また澳門資料について多くのご教示をいただいた Roy, Sit Kai Sin 薛啟善（澳門特別行政区政府文化局澳門博物館保存及修復）、陳志亮（澳門特別行政区政府文化局澳門博物館保存及修復）、盧泰康（台湾台南市台南芸術大学）、盧大成（澳門芸術博物館）、潘国雄（澳門遺跡出土陶磁器収集家）に感謝。また所有品の撮影と掲載許可をいただいた澳門博物館及び潘国雄に感謝。

## 参考文献

編集部, 1997 「澳門博物館將展近古史文物三千明清瓷片崗頂項出土始末」『澳門雜誌』1997年12月, 第3期, 6-11.

「澳門半島及港口図」1884年『歴代澳門航海図』

(金沢大学 [tatsuosasaki@hotmail.com](mailto:tatsuosasaki@hotmail.com), 有田町歴史民俗資料館 [nogami.takenori@gmail.com](mailto:nogami.takenori@gmail.com), 金沢大学 [hanaesa@kenroku.kanazawa-u.ac.jp](mailto:hanaesa@kenroku.kanazawa-u.ac.jp))

## 金大考古 68 号目次

- 佐々木達夫・野上建紀・佐々木花江「青森県むつ市・北海道松前町・上ノ国町・江差町・函館市の水中文化遺産」... 1-12  
 酒井 中「海難資料と沈船」... 13-16  
 野上 建紀「海揚がりの肥前陶磁」展」... 17-21  
 佐々木達夫・野上建紀・佐々木花江「澳門遺跡採集陶磁器—17世紀中国青花貿易—」... 21-25

## 『金大考古』投稿規程

1. 原稿は e-mail で編集委員に送る。
2. 校正は編集委員及び執筆者が校了を同意するまで行なう。
3. 査読は編集委員または委員から委嘱された2名で行なう。
4. 原稿の著作権は著者に属す。ただし、電子データ等の公開権利は金沢大学及び金沢大学考古学研究室が有する。

## 『金大考古』執筆要項

1. 原稿の書式： 文字版面は、A4 版横書き、24 字× 42 行の横 2 段組。余白は天 30mm 地 27mm 左 22mm 右 22mm。ヘッダーに「金大考古 号数、発行年 筆者・論文名・ページ数」、フッターにページ番号をつける。
2. 書体： 和文の場合、論文タイトル 16Q・著者名 13Q・見出し 13Q は MS ゴシック、本文テキスト 13Q は MS 明朝を使用する。欧文の場合、Times New Roman を使用する。
3. 原稿・図版類の入稿形態について： 原稿は word、図版類は JPEG 形式など汎用性のある形式でデータを提出する。その他のデータ形式の入稿は、編集委員と協議する。
4. 使用言語は日本語、英語、中国語を基本とする。
5. 文章表記について： 度量衡単位は cm、kg、m<sup>3</sup> 等のように記号を、数量は算用数字を使用する。
6. 註・参考文献について： 註は通し番号を付し、文章末尾に一括して掲載する。本文中の参考文献は著者・刊行年を記し、引用箇所が明瞭な場合はそのページ・行数も記入する。
7. 挿図・写真図版・表について： 挿図はトレース済み版下とし、図版や写真は縮尺・キャプションなどを入れる。割付見本を付ける。挿図および表は典拠を記す。但し執筆者自身の原図・表の場合は断る必要がない。
8. 所属、e-mail アドレスを論文末尾の括弧内に 11Q で記載する。

## 『金大考古』編集委員

小川光彦(金沢大学大学院)、垣内光次郎(石川県埋蔵文化財センター)、勝俣竜哉(御殿場市教育委員会)、小松隆史(井戸尻考古館)、酒井 中(金沢大学大学院)、桜井秀雄(長野県埋蔵文化財センター)、佐々木達夫(金沢大学)、庄田知充(金沢市埋蔵文化財センター)、高濱 秀(金沢大学)、野上建紀(有田町歴史民俗資料館)、前田清彦(鯖江市教育委員会)、渡辺芳郎(鹿児島大学)、渡辺玲(金沢大学学生)

---

## 金大考古第 68 号

金沢大学人文学類歴史文化学コース  
 大学院人間社会環境研究科  
 考古学研究室  
 920-1192 金沢市角間町  
[kanazawa-u\\_koukogaku@live.jp](mailto:kanazawa-u_koukogaku@live.jp)  
 2010年9月30日

---